広島大学学術情報リポジトリ Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本漢音資料に見られる全濁声母字の濁音形
Author(s)	佐々木,勇
Citation	小林芳規博士退官記念国語学論集 : 645 - 663
Issue Date	1992-03-26
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00030987
Right	
Relation	



日本漢音資料に見られる全濁声母字の濁音形

佐 Þ

勇

一、問題の所在

し、現存する古訓点資料をひもとく折に、その対応の原則に合致しない例に、我々はしばしば接する。 わが国の漢音・呉音と、中国中古音との対応の原則は、従来の研究によってほぼ正確に捉えられて来ている。しか

本稿では、その様な例の中で、日本漢音の頭音に注目したい。

日本漢音の頭音は、中国中古音の声母と左のような原則で対応する。

《原則》⑴有声音となるもの――清濁声母字・影母字

②無声音となるもの――全濁声母字・次清声母字・清声母字(除影母字)

無声音となるのが原則である。しかし、濁声点加点例を持つ現存の日本漢音資料中には、②の声母字に濁声点が加点 いま、この内の⑵に問題を絞る。日本漢音では、中国原音の全濁声母字・次清声母字・影母字を除く清声母字は、

された例が見られる。そして、それは全濁声母字に目立つのである。

中国中古音の全濁声母字が漢音では概ね清音で現れる中で、僅かながら存在する濁音形の有りさまを伝存する訓点

二、全濁声母字への濁声点加点例

まず、漢音資料における濁声点加点の実例を分析することによって、その出自を明らかにしたい。

I院政期以前

濁ることを示す濁声点を加点するようになるのは平安後期以降であり、それ以上は遡れない。しかも、院政時代に入 っても、資料によっては清濁を区別しないため、対象資料は限られてしまう。 問題の性格上、漢音資料中で濁音を区別しようとした初期の資料が要求される。しかし、漢音資料中に日本漢音で

その様な状況下で、平安後期から院政期の加点資料から得られた用例を、左に分類して掲げてみる。(②)

()漢籍

A字音直読資料

①長承本『蒙求』長承三年(1一三四)点

匡 衡 (9) 〈衡—匣母〉 二 愈 (f) 〈鮑—並母〉 。 堕情 (f) 〈堕—定母〉尚 鸲 (s) 〈鸲—群母〉章 拒 (s) 〈拒—

群母〉

B訓読資料

②『白氏文集』巻三・四天永四年(1111三) 点

堂。 < (三6) 〈堂―定母〉

③天理図書館蔵『弘決外典鈔』院政初期点

随,国の(31注)〈随一邪母〉。管,署(55注)〈署一禅母〉 相-。慶-。賀ス(71注)〈賀—匣母〉 重。瞳。(75注)〈瞳—定母〉

A字音直読資料

(二仏典

②『不動念誦次第』長暦元年(一〇三七)点 一切具三身(26)〈具一群母〉、尽罪(34)〈尽—従母〉

B訓読資料 ⑤東京大学国語研究室蔵『恵果和上之碑文』 平安後期点

⑥高山寺蔵『恵果和上之碑文』平安後期点

@『金剛般若経集験記』天永四年(一一一三)点(3) 。誕 (7)〈定母〉 寂ヶ(3)〈従母〉

●『大慈恩寺三蔵法師伝』巻第三 天治三年(一二二六)点

①図書寮本『文鏡秘府論』保延四年(一一三八)点 字。对(東4)〈字—從母〉 実。(東5)〈神母〉

②天理図書館蔵『大慈恩寺三蔵法師伝』巻第一 院政中期点

唇。城(31)〈城—禅母〉

⑤東大寺図書館蔵『新修往生伝』巻下 保元三年(一一五八)点(4)

蝗。(11 才)〈蝗—匣母〉。誕節。二(11 ウ)〈誕—定母〉

定の声母に濁音形が見られるという傾向も伺えない。 右には、 撥音尾字に続くための連濁と考えられる例も含まれるが、それ以外のものも比較的多く存する。

このような、漢音資料における全濁声母字の濁音形の存在理由については、次の二つが考えられる。

A日本漢音の母胎音が、全濁声母字の無声化を完了させていないものであり、それをそのまま反映した。

B別の体系として既にわが国に存在していた「呉音」の混入である。

Αは、『日本書紀』α群の漢字に、全濁声母字を濁音仮名とする例が僅かながら残ることを見れば、(5) これに続く所

われ(6) る。 謂日本漢音にも中国原音を反映した全濁声母字の有声音が残存していた可能性があり、一概に否定できないものと思

が一般に存する中で、漠然と採られてきたもののようである。

Bの考えは、日本漢字音において、 全濁字は呉音で濁・漢音で清(例えば、

字―ジ(呉)・シ(漢))、という規範

そこで、まずこのどちらの理由で日本漢音資料中に濁音形が見られるのかを明らかにしておく必要がある。

入したものである可能性の方が高そうであるが、何分にも用例数が少なく、右掲の例のみでは判然としない点が残る。 ここで再度、 前掲の濁声点加点例に目を戻すと、それらの例の多くが仏典に見られることによって、B呉音形の混

Ⅱ鎌倉期以降

右の予想を確かめるために、用例を鎌倉期以降の資料に求めてみる。

献の例を、表にまとめて記すことにする。 得られた用例を、 前節と同様の分類で掲げるが、例数が多くなるため、

代表的な日本漢音資料であると言われる文

A字音直読資料

(-)漢籍

『蒙求』諸本《全濁字異なり字数 三三一》 ①長承本一一三四年点

④東洋文庫本鎌倉中後期点

⑤道順書写本鎌倉後期点

⑥康永本一三四五年点

⑦国

五年 (1五1五) 点 会図書館本『重新点校附音増註蒙求』応永七年(一四〇〇)頃朱点 ⑧国会図書館本『附音増広古註蒙求』大永

音	擦	摩	声
匣	禅	邪	母
) 。g			1
。 後, 9 。 達知 玄, 33		随 "36	4
			⑤
● 第5 第5 8 8		随? 36	6
。 教 引 。 書 28 含 111	224 		7
。降 88 7 2 11 88 7 2 11 87 7 18 180 豪 180 豪 180 18 18 181 181 181	城学時ッ 225 ⁹⁶⁷	。 許 158 256 276 318 東 90 176	8

⑬『白氏文集』巻四正応二年(殷本紀建暦元年(二二一一)点	②" 白氏文集』 卷三 • 匹天永匹
(二)八九) 点	⑫金沢文庫古	年(二十三)
⑬『白氏文集』巻四正応二年(一二八九)点 ⑭『文選』正安二年(一三〇二)点 ⑮『白氏文集』巻三承平七年	殷本紀建曆元年(一二一一)点 ⑫金沢文庫本『群書治要』経部建長五年(一二五三)~正嘉元年(一二五七)点	②" 白氏文集』 考三·四天永四年(1 一三) 点 一页高山寺本 " 語語』 考七· 八蘇食 初其点 一页高山寺本 " 史話』
灬 ⑮『白氏文集』巻三承平七年	五三)~正嘉元年(一二五七)点	銀倉有其点 ①高山寺本"安記]

(1三五二) 点

、能言刀用点 のうじきょうら

B訓読資料

音 裂 破 音 擦 破 計 定 澄 並 神 牀 群 従 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 堕, 460 一。 飽; 192 (。印は、撥音尾字に続く例。左傍線を引いた例は、仮名書き音形から呉音形と判断されるものである。以下同。) 5 (5) 慈。 312 11 (11) 0 。 僕, 147 劇# 5 (5) 。影 群ジ 字。 222 。。 聚 15 (16) 絶。 118 156 o 杖字 201 416 新 新 587 。毘70 。簿16 備86 断 20 163 518 題 175 第 388 士》 22 50 滙至 37 (45) 勃# 311

口仏典

A字音直読資料

(7) 『仏母大孔雀明王経』諸本《全濁字異なり字数 二四五》(梵語音写字・陀羅尼字は除く。) ①仁和寺蔵建久八年(一一九七)頃点 ①東京大学国語研究室蔵鎌倉中期点 ②竜門文庫蔵延慶二年(一三〇九)

点

①国会図書館蔵元応二年(一三〇二)点 @東寺蔵鎌倉末期朱点(第一四函1号)

										 ,	
	計	音	裂	破	音捷	察破	音	子 拼	摩		声
	pΙ	澄	定	並	床	従	匣	禅	邪	孝	母
•	1 (1)		 三 59								2
	0										100
	2 (2)	持 244			逸* 221						100
,	5 (7)	:		。 8 九 362			照。。 八名 。 第八名 。 第一名 。			乏。八日。分一33五29八17	12
	4 (6)			白。,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,		:	- - - - - - - - - - - - - -	+ 227	隋 283 298 359		13
	5 (5)	3.	。濁。 405 第564				第0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0		随? \$10		13
	7 (11)	· 第32	。 第 120 第 330 第 290 291 292 292			。 第 49	。 第65	22 36			15

擦	皮	音	· #	察 摩	声
神	従	匣 神	邪	奉	母母
舌: 上: 60 称: 中235 称: 上: 60 称: 中235 称: 中235	残 [*] 、聚 [*] 。 下 187 187 303 残 [*] 231	。何下340。華,中57。華,中57。何是46 思,上72。何,上66 思,上73 第一上73 第一上73 第一上73 第一上73 第一上73 第一上73	* <u>%</u> ***********************************	服 (神) 罰。 割。 上 3 () 割。 上 4 () 割。 上 3 () 割。 1 () 3 () 3 () 3 ()	①
舌·疗 術 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	· 慈广 75 · 慈广 75 · 悠下 75 · 8 · 8 · 8 · 8 · 8 · 8 · 8 · 8 · 8 · 8	で、第2 年 18 年 1	第 第 第 章 中 上 522 下 320	復復復復期 上上上上上 145 67 135 131 330 第7 234 222 212 311 中 223 242 551 中 224 3 331	(i)
実下 舌.	·自下373 残** 残中231	何下340 章 中97 571	巡下217。那中2502	縛。 復 罰 上 下上 上 177 223 137 243 223 145 縛. 中 罰。 上 249 上 391 243 178 403	æ
舌	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	惠 中 中 第 降 。 中 5 7 8 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9	第 上 68 中 250 522	復復/復/復/罰分 中中上上 5 下 249 234 242 67 330 272 131 331 521 復 135 521 上 137 67 234	1
五十	字下 18 元 25 元 18 元 231	· 華. 中57 。何. 上46 。 華. 中57 。 何. 上46 。 華. 中57 。 蔡. 中57 。 蔡. 中57		標介復復復復之 187 224 137 242 131 177 下 133 中 24 234 罰下 232	(B)

音	音擦摩						
匣	奉	母					
華. 6733 。華. 88		в					
獲.5.	縛;	0					

◎高山寺蔵鎌倉中期点 ◎高山寺蔵正保四年(一六四七)写本

<u>(1)</u>	計		音	裂	破	音
般若	п,	群	澄	定	並	
(1) (別の) (別の) (別の) (別の) (別の) (別の) (別の) (別の	16 (39)		. 技美 始		原中 253 第下 554 554 554 554 554 555 565 565	実: · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
異なり字数 九一》	17 (49)			。 敬允 295	身下 315 253 暴本身上 18 69 245 524	
(梵語音写字・陀羅尼	19 (38)	極:		·"噉ź 中 295	便,中 253 便,中 253 便,中 253 便,下 253 便,下 253 便,下 253 169 245	
字は除く。)	13 (39)			·····································	集 使 下 169 年 169 年 169 169 169 315	
	23 (63)		。 除 509 749 8 342 147		・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	<u>。</u> 元 下 224

音	声		
匣	禅	奉	母
			©
皇分 10 オ		:	Э
。行8日ウ ₈ 夏62オ	当 3 3 9		P
河。10才。霞,10才。下。四15ウ	『順一3 オ 侍四16 ウ	凡四パオ六・オ	@
学。 四 339	。 世一 33 。 談三 133 。 談五 135	·房一次 250	P

B訓読資料

高山寺蔵『文鏡秘府論』天巻 鎌倉初期墨点(五七函6号)(月本雅幸 「高山寺蔵文鏡秘府論の訓点―訳文・ ⑥高山寺蔵『恵果和上之碑文』 平安後期点 ①東大寺図書館蔵『新修往生伝』巻下保元三年(一一五八)点 _(P)

『遍照発揮性霊集』鎌倉末期~南北朝期点(ただし、調査は巻一~巻五の漢音の合符が加点された例に限る) 天巻一」「訓点語と訓点資料」第八十二輯による) ⑨京都女子大学蔵『表白集』 鎌倉中期点 ①六地蔵寺蔵

音 裂 破 音擦破 計 定 神 牀 澄 並 别。 実。 。 :除 209 。 堕 65 别。 50 。 実 109 171 5 (11) 。 実 175 。 実。》 149 152 别® 49 事》 除² 堕 62 别:テ 49 読) 61 9 (12) ·便; 181

三、全濁声母字濁音形の由来

	,
(1)初期の濁声点加点資料	一名に一覧した全漢字に対する漢声点加点例から知られる点を以下にまとめてみる。
(平安後期・	る選声点か点
院政期の資料)	でカら知られる
における、	点を以下に
(1)初期の濁声点加点資料(平安後期・院政期の資料)における、全濁声母字濁音形の出現状況は、特定の声母に	まとはてみる
特定の声母に	

②時代が降ると共に、濁音形が増えていく傾向にある。偏らなかったが、その事情は時代を降ってみても変わらない。

(3) 濁音形は、仏典に比較的多く、漢籍に少ない。

(4)この傾向のもとで、漢籍の『蒙求』では、僧侶の加点にかかると思われる①長承本・④東洋文庫本に比較的多

日形					
計	音	裂	破	音捷	察破
βI	群	定	並	床	従
2 (2)			。 延之 7		寂。 33
2 (2)		7 E	。 延 19 ウ		
4 (4)					蔵。59ウ
13 (16)	一	金董六39	○田一3 ポテピ 2 ホ 。地四3 ウ 白゚六1 ウ		
14 (17)	◎ ‡ 数	代。四62 度四m	。整二四。道 3000 3000 3000 3000 3000 3000 3000 30	事。************************************	泉"一级 63 200

.

くの濁音形が見られる。

先の両可能性

A日本漢音の母胎音が、全濁声母字の無声化を完了させていないものであり、それをそのまま反映した。

B別の体系として既にわが国に存在していた「呉音」の混入である。

の、B説を支持するようである。特に、(1)・(2)の点は重要である。なぜならば、中国原音における全濁音の無声化の

実態が、次のように捉えられているからである。(8) (1)全濁音の無声化は隋末唐初期 (7世紀) から見られ、唐代を通じて進行する。

③唐代(六一八~九〇七年)末に至っても完全には完了しない。

⑵摩擦音→破擦音→破裂音の順で進行する(定母が最も遅れる)。

中国側で全濁声母字の無声化が進行する中でわが国では逆に全濁声母字の濁音形が増え続ける現象と、漢籍よりも仏 かった。したがって、中国原音の状態をそのままに反映したというA説は、否定されるのである。また、 くの例がみられるはずである。しかし、実際には得られた用例の当該字の声母は様々であり、特定の偏りは見られな 資料の全濁声母字への濁声点加点例が、中国原音の実態を反映しているならば、並母・定母・澄母・群母に、より多 中国での全濁音の無声化は、破裂音(並・定・澄・群母)が最も遅れた事が判明している。よって、わが国の漢音 A説では、

呉音形の影響によってわが国で生じたものであることが明らかとなった。 以上によって、これまで掲げてきた全濁字の濁音形は、漢音の母胎となった中国音のものを引き継いだのではなく

典に濁音形が多いという事実を説明できないものと思われる。

四、全濁声母字濁声点加点例の声調

なわち、呉音の影響による濁音形をとっていた漢字の声調は、はたして漢音声調の儘であったのか、それとも、声調 ここでは、濁声点が担っていた、濁音表示以外のもう一つの機能である声調表示の点に焦点をしぼってみたい。す

もやはり呉音声調に変わっていたのかという点について調査してみようと思うのである。

での漢音声調・呉音声調を、何の限定もなしに特定することはできそうにない。また、漢音声調と呉音声調とが等し い漢字も少なくない。そこで、ここでは、右の全濁声母字に加えられた濁声点が示す声調を『広韻』の声調と比較し、 この問題の解明にあたっては、各漢字の漢音声調・呉音声調を明らかにする必要がある。しかし、当該字のわが国

『広韻』声調との比較の結果、その声調と一致しない例を持つ漢字は、次のごとくである。(9)

そこで相違の見られたものについて検討を加えるという方法をとることにしたい。

1 『広韻』 平声であるが上声点が加点された漢字

⑧城、①時慈、⑥①房、⑩邪持除、⑪田童、①塵

(いずれも呉音資料では、去声または上声である漢字)

①何、①凡群(いずれも呉音資料では、去声または上声である漢字)

2 『広韻』 平声であるが去声点が加点された漢字

3 『広韻』上声であるが平声点が加点された漢字

①聚杖、 @@雙 ①土下(呉音資料では、「杖」のみ去声・上声。他は、いずれも平声の漢字)

4

『広韻』去声であるが平声点が加点された漢字

①字、④暴、①®①復、患自、⑨侍地、①事代度(呉音資料では、「代」のみ去声・上声。 (10) 他は、 いずれ

も平声の漢字)

5『広韻』去声であるが上声点が加点された漢字

右の、『広韻』声調と異なるところの声調は、 5の場合を除き、 大部分が呉音資料から知られる声調と一致するの ③署、④⑥畫、①⑥⑩備、①鼻、⑥自、⑩字(呉音資料では、「署」は去声。他は、いずれも平声の漢字)

(1)呉音声調と一致する例を持つ資料は、仏典(アルファベットの文献記号)に多い。

②呉音声調と一致する例は、時代が降ると共に増加する。(鎌倉時代以降〈④~・①~〉の資料が多い。)

である。さらにその内訳を資料毎にみると、次の二点が判明する。

音声調の儘の例が多いが、仏典や、漢籍でも時代の降った資料では、声調までも呉音声調となる例の割合が高くなる すなわち、比較的早い時期の資料や漢籍訓点資料では、呉音の影響を受けて濁音形は採るものの、その声調は、漢

と言えるのである。

五、全濁声母字濁声点加点字の仮名書き音形

に気づかれる。漢音と呉音とが、仮名書き音形で異なる漢字は、次の九字に過ぎない。 調べてみる。すると、漢音形と呉音形とが清濁のみの相違であり、仮名書き音形では等しい漢字が大部分であること ここで、視点を移し、これまで問題としてきた濁声点加点例の、各字の日本漢字音における仮名書き音形について

行・城・華・下・誠・懃・患・夏・凡

音で唱えられることがあったことになる。 したがって、呉音と仮名書き音形は同形であって、清濁のみの相違の漢字について特に、早くから呉音と同じく濁

右に記した「行」以下の例は、実際の資料中の仮名書き音形も呉音形であり漢音の全濁声母字の濁音形の例からは

除外されるべきものと、連濁によって濁音になった可能性の存するものである。(ほ)

漢音と呉音とで仮名書き音形が同一であり、漢音―清・呉音―濁の漢字が、多く呉音の濁音で唱えられるというこ

の事実は、室町時代以降の資料については、既に指摘されている。 ①『文明本節用集』文明六年 (一四七四) 頃写 して、本資料に名高い「不濁点」は、漢音でも濁音で読まれがちな全濁声母字に対して、その漢音は清音であ 漢音形として朱書きされた音の中に、呉音形と清濁の相違だけの全濁音字に、濁点を付した例がみられる。そ

②珠光編『浄土三部経音義』天正十八年(一五九〇)刊

ることを敢えて示した符号である。(ほ)

原則として、漢音と呉音との両音形を掲げる音義であるが、次の全濁音字には濁音形しか記さない。珠光にと っては、本来漢音である清音形は、記す必要のない音となっていたものと思われる。

邪母—随8-4 辞15-3 徐9-6 旬15-2 巡8-3 尋5-4 邪15-2 奉母―鼻16-3 備9-6 便10-6 仏9-3 罰111-6 伐12-1 縛5-3 復9-4 父10-5 服15-7 芝15-4

2 護17-6 害73-7 亥559-1 慈67-6 字89-7 罪29-1 - 幻11-5 支13-3 亳11-3 豪13-5 号51-7 含55-2 学8-4 (以下一四字で- 熟21-2 十13-1 上13-5 甚16-6 善33-6 順12-5 什13-6 (以下八字略) ・在2-1 尽13-1 残13-1 前8-4 全13-1 坐25-3 (以下一三字略) 学和-- (以下一四字略)

匣母—互36-2

禅母—瑞51—1

牀母─事35--独品。(以下二一字略)

③中村惕斎『小学示蒙句解』元禄三年 (一六九〇) 序

群母--祇4-7 具61-5 群41-3 妓87-6 及40-2 香48-2

以外の、訓読文の漢字の音を調査するとより一層明らかになる。」 と呉音が清濁以外でも異形である漢字は呉音で読まれにくいという傾向のあることは、以上で取り上げた漢字 「『小学示蒙句解』の訓読文において、漢音と呉音が清濁のみで違う漢字が呉音(濁音)で読まれやすく、漢音

(松井利彦「近世漢学における漢字音の位相」〈「国語国文」四〇一五〉)

そして、 現在、全濁音声母字の多くは、通常濁音で読まれるのである(事ージ・罰ーバッ・縛ーバク・巡ージュン

結

六 び

最後に、これまで述べてきたところのまとめを記し、結びとしたい。

(1)日本漢音における全濁声母字の濁音形は、その存在は指摘されていたものの、なぜ漢音資料中に全濁声母字の

濁音形が見られるのかについては明らかでなかった。

日本漢音ではいわゆる清音であったと考えてよい。

今回の考察によって、それらは、呉音形の影響によるものであると考えられた。したがって、全濁声母字は、

②呉音形の影響によって加えられた濁声点の声調は、比較的早い時期の資料や漢籍訓点資料では、漢音声調の儘

の例が多いが、仏典や、漢籍でも時代の降った資料では、呉音声調となる割合が高くなる。

⑶仮名書き音形が漢音と呉音とで異なる漢字に着目して、呉音→漢音への移り変わりを説く論が先学によってな されている。 (16) しかし、一方、「全濁声母字は、漢音ー清・呉音ー濁」という規範が存する中で、室町時代以降規範に反して、

漢音を記したと思われる箇所に、《仮名書き音形が漢音と呉音とで同一の漢字については、 呉音の濁音優勢》 の実態を示す資料があることも報告されていた。この度の考察によって、日本漢音の頭音を清と濁とで捉え始

めた時期(平安後期)に、既にこの傾向が見られることが判明した。

松井利彦氏は、前掲の論文中で、甲種の漢字―漢音と呉音が清濁のみで違う漢字・乙種の漢字―漢音と呉音とが清

濁以外でも異形である漢字と規定して、以下の見通しを述べておられる。 中世末期から現代に至るまでの字音の交替は、大きく分けると、呉音が漢音と交替する、漢音が呉音と交替する

という二つの方向において見られる。そして、前者は乙類の漢字(行、人、性、静、男など)に多く見られ、後

者は甲種の漢字(合、群、造、上、談など)に多く見られる。

661 政・鎌倉時代にまでさかのぼらせて言えるものと思われる。 この指摘は、具体例を示してなされたものではないが、大きな流れとしては、漢音と呉音との交流が著しくなる院

(1) 築島裕「濁点の起源」(「東京大学教養学部人文科学科紀要」第三二輯五号) 参照。

- (2)現在複製本で知ることができるものの内、比較的純粋な日本漢音資料であるとされている文献から得られた例である。() 内は、用例の所在を示す。
- 3 小林芳規先生からお借りした抜き書き移点本による。
- 4 鈴木恵氏から拝借した移点本による。

6

- (5)森博達「《日本書紀》歌謡における万葉仮名の一特質―漢字原音より観た書紀区分論―」(「文学」四五―2)参照。 岡本勲氏・高松政雄氏は、この考えに立つ様である。岡本勲「日本漢音に 於ける 頭子音の 清濁(下)―韻鏡清の字にして日
- し、いずれも初期の日本漢音資料の例が不足しており、説得力を欠く。 本字音濁となるものに就て丨」(「国語国文」三八丨一)、同「注音本『開蒙要訓』と日本漢字音―清濁のゆれをめぐって丨」 (「訓点語と訓点資料」第七十八輯)、 高松政雄「「正音」の清濁-名褻抄の性格の一面-」(「国語国文」四六-一一)。 しか
- (7)沼本克明「高山寺蔵理趣経鎌倉期点解説並びに影印」〈「鎌倉時代語研究」 第六輯〉、同「高山寺蔵『般若理趣経』-分韻表-」 **〈「昭和六十三年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集」平成元年三月〉、による。**
- 8 水谷真成「唐代に於ける中国語語頭鼻音 Denasalization の進行過程」(「東洋学報」三九一四)、森博達「《日本書紀》歌謡に おける万葉仮名の一特質―漢字原音より 観た 書紀区分論―」(「文学」四五―2)、 高松政雄『日本漢字音概論』一九〇・一 九一頁、など。
- (9)『広韻』上声字に去声点が加点された例は、中国側の声調変化である上声全濁字の去声化の反映と考えられるため省略した。 gす③④などは、前掲の文献記号である。
- (10)「代」は、呉音声調とも一致しない。『広韻』声調と日本漢字音の声調とのずれが現れた例と考えられる。
- (11)ここで呉音の声調を知るために用いた資料は、『承暦本金光明最勝王経音義』、『法華経単字』、『法華経音訓』、妙一記念館蔵

が無い。後考に俟ちたい。

のための上声化と考えられる。佐々木勇「日本漢音に於ける声調変化―岩崎文庫本『蒙求』を中心に―」(「新大国語」第一 若経音義の研究 『仮名書き法華経』、国会図書館蔵『妙法蓮華経』、安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多経』、『大般若経音義』諸本(築島裕『大般 本文篇』に依る)、東大寺図書館蔵『中論偈頌』である。 5の諸字は、日本漢音では一音節字であり、

12 念のために記せば、全濁声母字の濁音化例が、もし中国原音の反映であれば、わが国の呉音の仮名書き音形との関係による このような差異は生じないはずである。

四号)参照。

- 13 今回の調査では、連濁の可能性のある例も一様に扱ってきた。漢音資料に於て、撥音尾字の直後の漢字に等しく連濁の可能 ら、漢音の連濁発生にも、当該字の呉音形が深く関わっていることが知られるのである。 性があるならば、呉音と仮名書き音形の異なる字も更に多く出現するはずであるが、その様な例は、僅かである。この点か
- 14 小松英雄「不濁点」(「国語学」第八○集。昭四五一三)、中田祝夫「文明本節用集のために」(『文明本節用集研究並びに索引 四六一2) 参照 影印篇』所収。昭四五一七)、 湯沢質幸「室町時代における清濁と呉音・漢音―文明本節用集を中心として」(「国語国文」
- 16 15 高松政雄「呉音・漢音-珠光 「浄土三部経音義」より―」 (「岐阜大学教育学部研究報告」 1 11 1)、 同「漢音の 清濁」 (「国語 沼本克明「変体漢文訓読に於ける字音語の性格」(「信州大学人文科学論集」第7号。)、来田隆「否定辞「無」を冠する漢語 国文」五六一九)参照
- 17 漢音と呉音とで仮名書き音形が同形の場合、なぜ漢音の清ではなく、呉音の濁に流れたのかについては、未だ考えるところ の音と意味―「無礼」の音の変遷をめぐって」(「鎌倉時代語研究」第四輯)など。
- 18 も必要であろうと思われる。また、その漢字がどの様な語の中で使用されているのかを、その語義変化をも考慮にいれて考 本稿の考察は、全濁声母字に限ったものであったが、他の声母字にも原則に合わない例が存する。それら全体の中での検討 察を加える必要がある。